

第三章 教師としての第一歩

元気にあいさつ

私は、前出の退職時の手紙のように、新規採用の際は「休暇等補助教員」だった。2年目に正式に配属され2年5組の担任としてスタートした。毎日発行した学級通信のタイトルは「元気にあいさつ」とした。まずは、元気に明るく過ごしてほしいという願いからだ。毎回5枚程度余分に印刷し、学期末・年度末にはそれらを束ねて冊子に綴じた。今思えば、当初から「記録へのこだわり」が大きかったのかもしれない。

「教師は、生徒から教わりながら育つ」と言われることがあるが、まさにそうだった。とにかく情熱だけは人一倍で、「継続は力なり」を信じていたことから、学級担任として「毎日必ず学級通信を発行する」を実行し続けた。やっているうちに「出すこと」に重点が置かれていき、内容が全くついていっていないときもあった。それでもなんとかやり切りつて、最後は243号だった。それは、当時の課業日（生徒が登校した日）と重なる。毎日発行にこだわっていた私は、学校の外に出かける「校外学習」の日でもバスの中で配っていた。もちろん、生徒の反応は「今日も配るの？」と引き気味であり、担任の自己満足だった。

そんな校外学習から戻った帰りの会で、「事件」は起こった。

校外学習の一日を振り返り、担任として話をしていた。

誰かが怪我をしたとか、仲間割れがあったとか、大きな問題があったわけではないものの、自分たちの役割を進んで行えなかった状況を振り返り、こんな言葉を発した。ずいぶん前の話で記憶が曖昧になっている部分があり、言葉は違うかもしれないが・・・。

「今日は、みんなよく頑張ったけど、守らなければならないルールを守れなかったり、友達に優しくできなかつたりしたから、70点だな。」

担任していたクラスは、女子のリーダーがしっかりしていて、みんなのために行動できる一方で、男子は（おそらく担任への反発心からか）こちらの思い通りに動いてくれない状況だった。自分としては、校外学習でしっかり役割を果たすとともに、勝手な行動をせずに、頑張っている友達を認めて「仲間としての優しさ」をもって行動してほしいと伝えたいつもりだった。端的に言えば、女子を褒めつつも、男子を叱るつもりだった。

しかし、リーダー的な存在の女子から意外な声があがった。

「先生、数学や英語で点数をつけられるのは仕方ないけど、行動や性格で点数をつけるのはおかしいと思います。」

勇気ある一言だった。思いもよらない言葉を、かばったはずの女子のリーダーから、しかもみんながいる場面で堂々と指摘されたことに、かなりの戸惑いを覚えた。

何か反応しなくてはならない、そんな場面であることは理解していた。

言い訳や反論、または、教師への口答えと受け取って叱責するという選択もあったかもしれない。しかし、本能的に、こう答えていた。

「その通りだね。私の考えが浅かった。みんな悪かったね。ごめんなさい。」

その後のことは、あまり覚えていない。

クラス経営が劇的に改善されたかというところと全くそうではない。うまくいかないと感じ続けていたからこそ、「はじめに」で紹介した「先生、私は教師にむいてないんじゃないかなあって思うんです。辞めたほうがいいかなあって。」という言葉につながっていく。

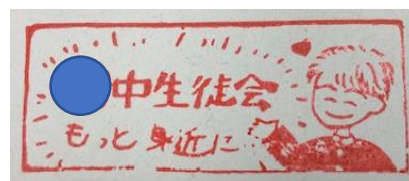


学級通信の冊子 左から 中2の1学期・2学期・3学期、中3 表紙の絵は生徒作
※ 最初の1年間は、学期ごとに1冊。その後は毎年1冊ずつ作製していった。

全てがうまくいかなかったのかと言えば、全くそうではない。

教員駆け出しの頃は、「苦勞は買ってでもしなさい」の言葉が常に頭の中にあった。現場では、実際にやることができるか・・・が大事だからだ。そもそも専門でもない「美術」を2学期間も教えた経験も手伝って、「たいていのことは、やればできる・・・」という思いがあったのだと記憶している。幸いにも、同期が4人いて、年齢の近い先輩方もたくさんおられた。何か知りたいこと、聞きたいことがあれば自分から聞くことで答えやアドバイスをもらえる環境にあった。

その当時、校務分掌として任されていたのが「生徒会」だった。それも、委員会活動や行事の運営を牽引していく立場の「生徒会本部役員」を指導することが中心だった。右は、本部役員が作ったハンコ。当時、自分が日光を使って版をつくるハンコを使っていたのを真似して、「なんとか生徒会活動をみんなのものにしたい」という思いで生徒が作製したもの。今では私の宝物になっている。



生徒会本部役員が作製

一番しんどい子を真ん中に

卒業生を出して、翌年は再び3年の学級担任となった。生徒のクラス替えがないのに、先生が変わるというのは、教師側にとってはけっこうしんどい体験なのだと感じていた。また、学年の職員で構成する組織についても、これまである組織に入っていく難しさを感じることもあった。しかし、学年スタッフやクラスの生徒たちの仲の良さに救われて、卒業期には、1年間しかつきあっていないとは思えないほどの充実感を感じていた。「やればできるかも・・・」そう思わせてくれた1年間だった。

その次の年度（教員5年目）は、1年の学級担任だった。「担任」として新入生と関わるのは、初めてだった。新しいブカブカの制服を着た姿は、まさに新鮮だった。「なるほど、これが小学生から中学生になることなのか・・・」と折に触れて感じる場面があった。この頃になると、卒業生の弟や妹に出会ったりすることが増えてきて、これまで教えてきた経験がプラスに作用することが多くなっていた。それとともに教師としての自信もまた膨らんでいた時期だった。

しかし、その自信が揺らぐことが起こる。

中2に上がる際のクラス替えで新しいクラスになった時に受けもった女の子(Fさん)が、学校に来なくなったのだ。今では「不登校」の児童生徒はかなりの割合で存在しているが、当時は学年で数人というレベルだった。「なんとかして来られるようにしなくては・・・」焦る気持ちが大きくなり、教師としての自信が小さくなっていた。

Fさんには、いくつかの特別な事情があった。いわゆる中国残留帰国子女3世で、日本語の理解が十分ではなかった。それゆえに、友だちと心を通わせることが難しい状態だった。1年次後半に中国（ハルビン）から編入してきた頃は、隣のクラスに在籍し、時折明るい笑顔を見せてくれていて、私との関係も良好だったので、自分のクラスに入っても大丈夫だと過信していた。しかし、実際に2年生になってみると、クラス経営の稚拙さからか互いを尊重し合えるような環境を創り出せずいたことで、Fさんへの支援の手もなくなっていった。

この時、私に手を差し伸べてくれた先生（N先生）がいた。

N先生は、他学年の主任の先生だった。同じ社会科部会に属していて、つながりがないわけではないが、他学年にもかかわらず、本当に親身になって相談に乗ってくれた。

N先生とは、それまでにぶつかった経験があった。N先生が着任された年、社会科の教科主任を私からN先生に引き継いだ。自分自身は学級経営や生徒会活動、部活動を優先し、教科主任なのに社会科教材室の整理などについては、全く手をつけていなかった。引き継いだままで、あるものを管理する程度の意識しかなく、部屋の整理などをするつもりもなかった。N先生は、教材室を使い易くするために時間を使って整理整頓してくださっていた。

ある時、「社会科教材室を整理したから見ておくように」と言われたのに、「はいはい」と生返事をして全く見ることなく過ごしていた。

すると、N先生が血相を変えて私を叱ってきた。

「おいこら、お前ちょっとこい・・・。」

生徒と一緒にグラウンドでサッカーをしていた私は、「誰か先生を怒らせた奴がいるな」としか思っていなかった。暫くして何か様子がおかしいことに気づいた。呼ばれていた、怒らせていたのは、私自身だったのだ。サッカー部の生徒の前で、まさか自分が同僚である教員から叱られることがあるのか・・・と目の前の状況を理解できなかったが、生徒に簡単な指示をしてN先生のところに行った。真剣に怒っていた。畳の敷かれた休憩室に連れていかれ、正座をして説教を受けた。その様子を聞きつけて、教頭先生が部屋に飛び込んできて、仲裁してくださった。それで何とか怒りが収まってきたのか、少しトーンは下がったものの、私への怒りは続いている様子だった。

叱られるのも、当然だった。

本来やるべきことを後回しにして部活動（自分が楽しいこと）をしていた。せっかく社会科教材室を整理整頓したのに、見に行くこともしなかった。教頭先生の計らいもあり、N先生に許していただき、直ぐに社会科教材室を見にいった。しっかりと整理され、使い易くなっていた。自分の至らなさを痛感した。

そんなネガティブな関わりがあったN先生が、私に手を差し伸べてくれた。

一番しんどい子（Fさん）との関わり方を通して、「教師としてどうあるべきか」を教えてください。N先生に寄り添ってもらいながら、私はFさんについてのことをFさんの視点から見つめるよう努めた。そのことを記録しつつ、教職員の研修会等での関わり方の発表も行った。当時の研究大会での提案資料（提案時は翌年度）には、以下のように記していた。

1. はじめに

（前略）彼女の悩みの一端を知り、どうにかしようとクラスに投げ掛けたりしましたが、解決できないままに1学期を終えました。そして、夏休みが明けて3日目に、ついに彼女は不登校になりました。

2. 活動の経過

「センセ、もういいよ。」「学校に行っても日本語がわからないからつまらない。いみがない。」「お母さんの通っている日本語学校へいきたい。」慌てて家庭訪問した私にむかって、Fさんは、そっけなくそう言いました。

その夜、再びFさんを訪ねました。私は、どうにか彼女を学校に来るように説得しようと思いつきながら、あきらめの気持ちを半分位もちながら、話し始めました。話している中で、クラスの友達がFさんが来れないことを「悲しいこと」として捉えているということを伝えると、Fさんは涙ながらにこう答えました。

「今のままじゃ、学校にいてもきっと高校へは行けないだろうけど、3年の終わりまでやめないでいくよ・・・」それ以来、Fさんは、1日も休まずに登校し、クラス替えのないまま（私とともに）3年生へと進級しました。（後略）

今思えば、N先生との関わりがなければ、Fさんの存在を直視できなかった。N先生は、大変失礼な態度をしていた若造（私）に「本当の優しさ」を教えてくれた恩人である。

結果として、Fさんが笑顔で教室にいられる時間は少なかったが、特別な選抜方法で受検（受験）をして、自分自身で決めた進路に進むことができた。また、私自身が「外国につながる子の支援」に目を向けるきっかけの一つを与えてもらった。

そのFさんは、せっかく中国帰国生枠で入学した高校を1年生の2学期末に退学した。

私は、その退学届けを出す日にFさんに同行していた。当時のことが朝日新聞に取り上げられた。（朝日新聞 1993年3月1日 11面より引用）



職員室の電話が鳴った。「先生、〇〇高校から」。胸騒ぎがした。あの生徒が入学した高校から電話がくるなんて。

「彼女、高校やめそうなんです。もう教通問来ていません。働いています。でも、やめたい本当の理由を話してくれないのです」

昨春、ひときわ力を入れて送り出した生徒だった。まだ半年余りしかたっていない。

中国から来日して、中学の自分のクラスに編入した。台風で始業が遅れる電話連絡の意味がわからず、一人だけ登校したこともある。毎晩のように家を訪ねた。

「言葉がわからないからつまらな〜」。日がたつほどにいら

きょういく探検隊

⑧

だち、休みがちになった彼女の思いをクラスに伝え、友達の声を彼女に伝える。みんなの問題として考えたかった。通訳を探し、奔走した。

高校をやめた教え子は何人かいる。だれも、中退する前に中学の担任に相談なんかしに来ない。懸命に送り出しても、風の便りに聞くだけだ。重たい気持ちで、翌月、再び家を訪ねた。

奮い立たせようと、高校進学を勧めた。「中国帰国生枠」で合格した。奨学金を手配し、職員室でカンパを募った。彼女を受け入れ、悩み、奔走する

「周りの人や制度の応援もあって入ったんだし、あなたがいることでほかの人たちも学ぶことがある。それも切ることになる」

二学期の終わる日を待ち、一緒に高校に行った。校長室で退学届けにハンコをついた。「いじめられたっていろいろ、日本人同士だっていろいろあるよ」と校長。

いつかひとりで踏み出していける

「何かあったらまたいらっしやい」と担任。

する中で見えてきたのは、人付き合いが苦手ですり込みしていた自分だった。そんな自分を、彼女が前に押し出した。「教師」として立って行く上で、彼女は決定打だった。

「わかっている。でも、もう我慢できないの」ポツリともらした言葉は「バカにされちゃった」だった。

夏休み明けに訪ねたときは楽しそうだった。それが……。高校から電話があったその夜、すぐ家を訪ねた。

おはよう、って言っても無視する子がいる。とても人気のある子なの……。

「学校は、もういい」すでに決意は固かった。

中国帰国生枠で入学した女性一人だけだった。唯一できた日本人の友達も秋に高校をやめた、という。

いつか彼女が自分の場を見つけたとき、きっと、大きく踏み出して歩いていける。それまでちよくちよく連絡をとろう。それしかできないけれど。

300人300色

「一番しんどい子を真ん中に」という学級経営ができないまま、同じクラスで3年に持ち上がりになった。当時の教職員の異動のルールからすると、初任から7年間同じ学校にいることはとても珍しいケースであった。これは、1年目が休暇等補助教員として所属していた関係で、2年目からが初年度として見ていただけたから。今思えば、7年目は中3にあがる担任として「必要な人材」と見ていただけたからこそその残留だったと思う。

担任としてその3年間の中にも数えきれない失敗があった。もちろん、成功体験もあった。

生徒は、概ね目標をもって頑張っていた。3年の夏が終わり、進路選択の時期になると、勉強から逃げていこうとするいわゆる「ヤンチャ」な生徒の行いに振り回されることが多くなった。本来望ましい形ではないものの、その「ヤンチャ」な生徒たちは、私の言うことはよく耳を傾けていた。それらの生徒とのパイプ役の任務を負っていたような時期だった。

中学生にとっての受験は、大人へのステップ。生徒によっては途方もない壁に見えることもある。それを乗り越えるお手伝いをしているのだと思って頑張っていた。

卒業時には、学年の生徒数がちょうど300人。「300人300色」というキャッチフレーズを掲げて、8クラスがそれぞれ1文字ずつを担当し、各自が好きな色の手形を押して文字を描いた。私のクラスは6組だったので「0」の字を担当した。8枚が揃うと、それはそれは見事な作品だった。思い思いの色が300集まって、自分たちの有終の美（中学校の卒業）を意味づけていった。

予餞会のための掲示物であるにも関わらず、卒業式を前にした職員会議で、若き日の私は、「300人300色」の掲示物をそのまま残してほしいという発言をした。卒業式前日、手書きの手紙を書き、先生方の机に置いた。振り返れば、ずいぶんと大胆な行動をとったものである。今、周りを見渡しても、そこまでするような若者は見当たらない。

先日、荷物の整理をしている際に、ふと、当時の自筆の手紙（原文）が見つかった。校名が印刷された用紙、今から30年以上も前のものである。よくぞまあ残っていたものだと感心した。手書きの味わいが残るが、決して上手な字とは言えない、どことなく子供っぽい字だ。真剣に読み返すと涙が込み上げてきた。こんなにも、ストレートに自分の想いを伝えていたのだと我ながら驚いた。次は、その文章の最後の部分の抜粋である。

卒業式は生徒が主役です。（校長先生の言葉）【中略】主役が気持ちよく、すがすがしく巣立つための演出をするのも僕たちの務めです。先生！はがさないで。一人一人の情熱を信じて下さい。私はギャラリー前に貼りたい。貼らせてください。 文責 松井 聡



「300人300色、素晴らしいですね。」

卒業式で登壇されて、挨拶された方々全員が、この掲示物を褒めてくれた。「間違えていなかった・・・」感謝の気持ちとともに、そう感じたことを覚えている。式が終わり、卒業生が退場するタイミングで、担任の私たちは体育館の出口に移動した。

「せんせー・・・」私より大きな生徒、ヤンチャだった生徒が大泣きしながら抱きついてきた。あの時の光景、あの時の気持ち・・・。教師にしか味わえない珠玉の時間だった。

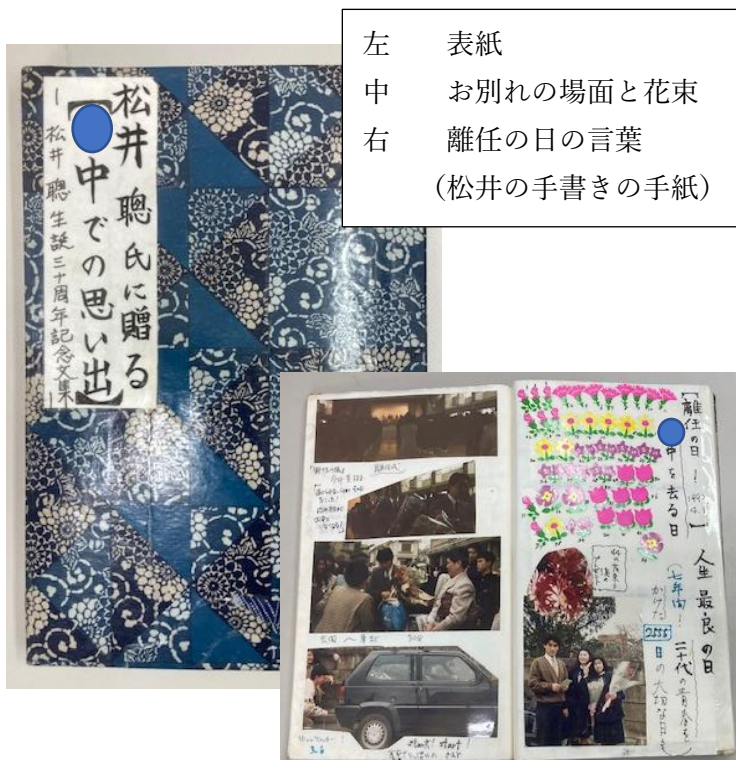
離任式は4月1日に行われていた時代。なんと、43の花束をもらってのお別れだった。車の後部座席が満タンになった状態で、新しい職場に向かった。新天地の〇中学校の2階の職員室のテーブルの上に、花束の山ができた。

「たくさんもらっちゃったので、誰かもらってください」

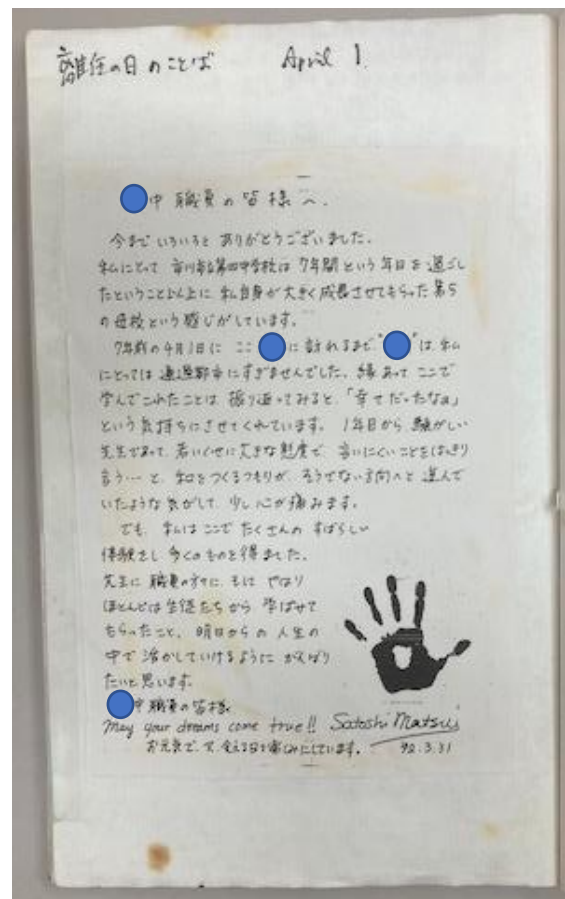
周りの先生方からしたら、「元気のいい、変わった感じの若者が来た」と思われたことだろう。新しい場所で、私自身の濃密な7年間を知らない方々との日々がスタートした。

異動した教員8年目は、30歳になる年だった。

その30歳の誕生日を記念して、前任校の同僚が「松井聡氏に贈る Y中での思い出 ～松井聡生誕30周年記念文集～」なるものを作ってくれた。そこには、ともに過ごした仲間の温かいメッセージ、当時の写真が溢れていた。最後の頁には、「300人300色」の写真と当時の私が映っていた。異動した年で担任を持たずに「免許外」の英語も教えていた我慢の時期だったので、自信を取り戻すような最高の贈り物をいただいた。これは、今も私の宝物。人生の宝物である。



左 表紙
中 お別れの場面と花束
右 離任の日の言葉
(松井の手書きの手紙)



アルバムに寄稿してくれた中の一人、同期の仲間（男性）の言葉を紹介する。

松井 T へ。

思い起こせば 7年前の3月、[] の何とか小で新採の召集があって、初対面のその日から変に軽くて、よくしゃべる男がいたのを どうも忘れることができません。 前途に多大な不安を覚えたことも思い出します。 [] 飯店で食べたチャーハン（だったっけな）、どういえば 5年間お世話になったあの店で、直接中へ入って食べたのはあの時だけかな？ 正式採用のはずなのに、身元不明人みたいな扱いで、授業は美術を持たされて…散々なスタートのように見えたけど、その男は割と平然と、何か楽しそうに仕事をしていました。

7年たっても腐れ縁は切れずにいるわけですが、その間にとっても大きく変わったのに 全然変わらない部分を持ち続けている男です。 何てって頑張り方がすごいのです。 学校に遅くまで残っていることがあっても、僕などはボーッとしている時間の方が長いんだけど、どうもその男は常に頭の中で何かを考えているらしいのです。 そして行動力がある。 考えて行動するのだから、どんどん色々な事を吸収していくらしいのです。 ただ、時々考えずに行動することもあるようです。 同僚としては自分の先を行っている人間です。 友人としては、強い所も弱い所も全て見せる。 とてもいい男です。 ま、こんな男がいるんだから、[] も捨てたもんではないでしょ。

松井エムの作った、人とのつながりは簡単には壊れないはずですが、それだけの気持ちと努力が入っているから。 これからも、ま、とそんな人間であり続けてよ！ []